



みんなで応援しよう！ 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会

東京オリンピックまで あと179日
(2020年1月27日現在)

12/7

パラオ共和国独立25周年および日本・パラオ外交関係樹立25周年記念企画 「クッキングプロジェクト in Hitachiomiya」

市緒川総合センターで、「地元の食材を使って、パラオ料理を再現したお弁当を調理しよう!」と題し、常陸大宮高等学校、小瀬高等学校の生徒12人が市の食材とパラオ共和国の食文化を融合させたお弁当づくりにチャレンジしました。調理にあたって、駐日パラオ共和国大使館のフランシス・マツタロウ特命全権大使や、ルーシー・マツタロウ大使夫人が、高校生にアドバイスをし、高校生たちはパラオの食文化について学びながら楽しそうに調理を進めていました。

調理後は試食を行い、マツタロウ大使からは「常陸大宮市の食材を使ってパラオの料理が上手に再現できている」とコメントがありました。調理した高校生は「難しかったけど、チームで協力して美味しいお弁当をつくることができました。いつか本場のパラオ料理を食べてみたい!」と話していました。

※本クッキングプロジェクトは、駐日パラオ共和国大使館で実施している「パラオ共和国独立25周年及び日本・パラオ外交関係樹立25周年記念事業」の一環として、東京2020大会のパラオ共和国ホストタウンである宮城県蔵王町と本市でホストタウン交流を促進するために実施したものです。

12/17 水戸啓明高等学校グローバルフロンティアコース生徒と交流

パラオ共和国研修生が水戸啓明高等学校を訪問し、英語に特化したグローバルフロンティアコースの生徒25人と交流しました。

水戸啓明高等学校とは、東京2020大会に向けたパラオオリンピック委員会柔道チームの事前キャンプを同校で2度練習をしたことが縁で、多文化共生への理解と国際交流の促進等を図りながら、本市とパラオに対する認知度の向上と東京2020大会への機運を醸成する目的で実施されました。

生徒と授業を一緒に受けた後、給食の時間には、パラオ語となった日本語の話題等で盛りあがり「アジダイジョーブ (おいしい)」と皆で言いながらの楽しい給食となりました。

その後、元青年海外協力隊 (JICA) としてパラオに2年間派遣されていた本市東京オリパラ推進室の本多美月主事が「一歩踏み出す勇気とチャレンジする気持ち、たくさんの人との出会いが大切」と経験談や協力隊に参加したきっかけを語り、生徒たちの夢の後押しとなる講演をしました。啓明高校生徒との交流とおして、パラオや本市の取り組みなどを市外へも発信する機会となりました。



▲ルーシー・マツタロウ大使夫人と常陸大宮高校生



▲調理したお弁当 (一部)



▲生徒と一緒に給食を楽しむシェナ



▲本多美月主事の情熱がこもった講演

12/13-14 【外務省事業】対日理解促進交流プログラム JENESYS(ジェネシス)2019を実施

東京2020大会に向けパラオ共和国のホストタウンである本市は、外務省事業対日理解促進プログラム「JENESYS2019(期間:12月10日～18日)」を13日と14日の2日間実施しました。この事業は、日本と大洋州の国々との将来を担う青年の交流をおして対日理解の促進を図るとともに、外交基盤を拡充することを目的として毎年実施されています。今回受け入れたのは、パラオ共和国・フィジー共和国・マーシャル諸島共和国・ミクロネシア連邦・サモア独立国・バヌアツ共和国の6か国24人の学生でした。

初日は、パラオ共和国研修生のケネリーさんとシェナさんから、ホストタウンの取り組みと本市紹介のほか今回の台風19号の被害状況などを英語で説明しました。その後、小瀬高等学校に会場を移し、「美術」「音楽」「書道」に分かれ1学年30人の生徒と授業をおした交流をしました。「美術」では、大洋州の国々の学生の出身国旗を砂絵で描き、「音楽」の授業は、慣れないギターにとまどいながらも生徒の指導で「ジングルベル」をみんなで演奏しました。「書道」の授業では、好きな英単語等を日本語に訳し、「海賊」「幸せ」「母」等の書を丁寧に書きました。授業終了後には、大洋州の国々の学生が感謝の踊りを披露するなどお互いに変な有意義な交流となりました。交流後、ホストファミリー (協力:市国際交流協会会員・小瀬高等学校生徒ほか) と面会し、日本生活を身近に体感できる初めてのホームステイに胸躍らせながらホストファミリーとともに家に向かいました。



▲好きな言葉を書きました



▲ホストファミリーと記念撮影

2日目の朝にはホストファミリーとのお別れ会が開かれ、大洋州の国々の学生にとってホストファミリーとのひと時は忘れられない思い出になったものと、皆の表情から受け取れました。お世話になった皆さんに、ミクロネシアの学生2人からは、ウクレレの音色にのせた澄んだ歌声のほか、フィジーやパラオ、バヌアツの現代的な踊りが披露されました。

別れを惜しみながら向かった西の内紙「紙のさと」では、色付けした和紙の原料を細い針金のついた棒ですくい上げ台紙にのせる絵付けの体験をしました。大洋州独特のカラフルな色使いの作品を手にした学生からは、「ヌルヌルした原料に驚いたが、とても楽しかった」「姉の誕生日プレゼントにしたい」と話すなど楽しんだ様子。本市伝統文化に触れることができました。体験後は、道の駅常陸大宮～かわプラザ～で、清流久慈川を眺めながらの地元野菜等を使った昼食を食べ、本市の魅力を存分に味わった2日間となりました。

16日に江東区で開催された報告会では、「砂絵の授業体験が非常に面白かった」「初体験となるホームステイは日本文化や生活をよく知る機会であるため、もっと長くしてほしいかった」等の学生たちの感想が述べられました。彼らには帰国後、日本や本市での経験を家族や友人、大学等で積極的に広く伝えていく対外発信の効果が期待されています。



▲出身国の国旗を砂絵で描きました (手前:バヌアツ 奥:サモア)



▲絵付け体験